

切磋琢磨

園長 児嶋 草次郎

12月に入り寒い日が続いていて、春からずっと咲き続けていたカンナは、朝の霜ですっかり煮えたように変色してしまいました。秋の終わりです。みごとに横葉した大イチョウも落葉し、黄金のジュウタンとなり、のゆり幼児園と園の小さい子供たちを喜ばせました。メランポジウムもマリーゴールドもサルビアも秋の花はすべて終わりです。本格的な冬がやって来ました。日本スイセンはカンナの間で芽を伸ばし、すでに花を咲かせ始めています。自然は、確実に移ろっていきます。まさに「四時行われ、百物生ず」です。

さて、今回は、12月5日（日）、高原町の総合運動公園で開催した、石井記念友愛社の経営する石井記念友愛園、石井記念有隣園（都城市）それに高原町内の神武の家、三つの園による駅伝・持久走交流大会のことを書かせていただきます。毎年恒例の宮崎県内児童養護施設10施設対抗の駅伝・持久走大会は、今年もコロナ蔓延防止のため中止となり、職員も子供たちもストレスをためていたので、3施設で行うことにしたのです。宮崎県内は、このところコロナ感染者ゼロの日が続き、やれない状況ではありませんでした。神武の家の職員が積極的に動き、幸いにして総合運動公園の広い芝生の広場を借りることができたのです。

朝7時半ごろには園の自家用車に分乗して園を出発。約1時間半かけて現地に到着。私は、高速を下りるとそのまま狭野神社へ直行し、今日この地で開催できることを感謝し、また無事に進行できることを祈願しました。

9時15分開会式。石井記念友愛社後援会「石井十次の会」西諸支部の石原支部長さん他4名の方、都城支部の持永支部長さん、新森副会長さん方がさし入れ持参で応援に駆けつけてくださいました。友愛社の関係者だけではなく、こうして外部の方々の視線を感じることで、子供たちはより力を発揮することができます。途中からは、小学校教員、福祉施設職員、自衛隊員等をやっている友愛園の卒園生も姿を見せてくれ、子供たちにより強いエネルギーを与えてくれました。

高原町総合運動公園はすばらしい芝生の広場でした。西にドーンと霧島連山を望み、その活火山に抱かれるように、しょうやかな高原中学校がこの広大な広場の西側に建っています。連山の一番南側に天を射すように立つ高千穂の峰（1574m）は、天孫降臨の神話も残っていて、あの坂本龍馬も魅入られ登った神聖な山です。この山の麓に建っているのが狭野神社で、この地で生れ育った神武天皇を祀ってあります。石井記念の神武の家を作ったのは、平成28年で、今年で6年目になりますが、中学生たちは約2.5Kの道をこの高原中学校に自転車で通って来ています。霧島山の雄姿を毎日見上げながら学んでいるのですから、ゼイタクなものですが、この風景が日常化したらなんでもなくなるのかもしれない。職員の日々の鼓舞激励は必要なのでしょう。

広場は周囲を走れるようになっていて、一周900mだそうです。中は一面芝生となっており、普段はサッカーの練習場として使用されているようです。手入れもしっかりされており、芝のはげた所はなく歩いていてもやわらかく心地よく感じます。

友愛園は子供・職員合わせて73名、三施設と応援の人で200名弱の大人子供たちが広場の北側のゴール地点に集まりました。

開会式は9時15分から。私は代表として次のように挨拶しました。

「12月恒例の県内10施設が集まっての駅伝・持久走大会はコロナ蔓延防止のため今年度も中止になりました。しかし、友愛社の子供たちは、そこですぐあきらめてしまうような消極的な人間であってほしくはない。今、宮崎県内は落ち着いているし、今回3施設で交流大会をやることになりました。みなさんの年頃には、切磋琢磨は必要です。

みんな霧島山を見てください。友愛園の子供たちは10Kハイキングや20Kハイキングで西都原に行きます。西都原はニニギノミコトとコノハナサクヤヒメが出会った場所ということになっています。その曾孫になるのが、日本の最初の天皇になられた神武天皇です。この高原町は神武天皇の生まれた所ということです。小さい頃の名前はサノノミコトと言いました。狭野神社は、神武天皇をお祀りする神社ですが、神武の家の子供たちは月1の掃除のボランティアに行くようになったのでしょう。神武天皇は、この高原で生れ育ち、都城、宮崎へと出て行って、日向の美々津から日本統一へ向けてヤマトへと登っていきました。有隣園の子供たちも都城の狭野神社へ掃除の奉仕にいらっていますよね。

私たちは石井十次の導きとお守りで生活しているけど、もう一方において、神武の導きとお守りもいただいているのだと思いながら、今日はがんばってください。」

競技は9時35分からスタート。まず持久走です。小学生低学年男女、小学生高学年男女、中高生女子、中高生男子に分けて行われました。小学生は900mを1周、中高生は2周です。印象的だったのは、ネネ（中3）、リュウセイ（中1）、リョウタ（中3）の3名の走りです。ネネはこの1年、成績面でも作業面でもかなりがんばるようになり、成長を感じました。このレースでも1周目は1位からかなり差をつけられていたのに、2周目で追いつき、1位でゴール。根性も身について来たようです。リュウセイは、中1とは見えないような力強い走りで1位でゴール。職員に対しては、かなりこだわりが強くグチも多いようですが、学力だけではなく運動面でも能力の高さを感じます。色んな面でまだまだ伸びしろを感じさせられます。感情に流されず、しっかり自戒自規のできる人間に成長してほしいと思います。リョウタは、中1、2の頃は一緒に園芸部で花の苗を育てたりしていましたが、この秋頃から野球部へ移りました。体も大きくなって来て、野球もやれると自信をつけて来た結果だと思います。後半途中、ちょっと弱気も見せたけど、最後まであきらめず、2位に入りました。この力をしっかりコントロールしてほしいと思います。

さあ駅伝です。小学生は一周、中・高生は二周で、10人がタスキをつなぎます。友愛園（定員45名+小規模6名）2チーム、有隣園（定員39名+小規模6名）2チーム、神武の家（定員20名）1チームで、5チームによる競争です。それに3施設の職員たちから希望者をつのつての職員合同チームも参加します。

駅伝は、日本特有の競技でしょう。大学駅伝が有名ですが、次の走者にタスキを渡すために、自分を無にしてただひたすら一秒でも早く走る。勝利はみんなの和が成り立った時に結果としてもたされる。こんな競技は、利他主義の日本だからこそできるものだと思います。児童養護施設は集団生活ですが、普段互いにグチや不満を言い合いながらも、試合になったら、一致団結して協力し合う。すばらしい日本のスポーツ文化だと思います。大学駅伝チームや野球チームが強豪ほど寮での集団生活を大切にしているのを見ると、我々もこの駅伝文化を今後も守っていきたいという気持ちになります。

雲一つない晴天。風もなく心地よい清冷な空気。駅伝には申し分ない天候でした。私はスタート地点の群から離れて南側のちょうど900mの半分ほどの所で応援することにしました。一人ひとりの表情もよく観察できるし、息づかいも把握できます。私の大声での激励も耳に入るでしょう。

小学校低学年からスタートして、最初は渾然一体となっていましたがいよいよ差が開いて、1位が有隣園その後友愛園と神武が追いかけるという展開になっていきます。職員チームは小学生低学年の段階からそれぞれが全力で走って独走体制を早々と作ってしまいます。走る距離も希望に合わせていますし、人数も多く子供たちと共通の条件ではありません。親善交流をねらったあくまでもオープン参加です。

有隣園は常に友愛園打倒を目標に練習をして来ています。一昨年度は友愛園が県の施設対抗駅伝大会で優勝しましたが、その前の年は有隣園が優勝しています。力は常に拮抗（きっこう）しています。現宮城園長は友愛園の指導員を重ねた後園長として赴任していますので、友愛園を越えることが目標となっているようです。私は友愛園の園長としてはもちろん友愛園に勝ってほしいと思いますが、理事長としては、互いに切磋琢磨し合って高め合っていくことを望んでいます。

今年度は、野球もバレーも施設対抗大会で友愛園が優勝しています。参加施設が年々少なくなっていくことを淋しく感じています。あの「新しい社会的養育ビジョン」がでて以来、児童養護施設も大きく変わりつつあり、施設の「高機能化」の名のもとに、個別指導が強化され、グループワーク的な指導は軽視される傾向にあります。参加チームが少なくなっているということは、職員たちの意識も変わってきているのかもしれませんが。個別指導やカウンセリングだけでは子供は育たないのに、せつかく先輩たちが積みあげて来たグループワーク・スポーツを放棄するとは、もったいないことだと思います。このような駅伝競技もスポーツによるりっぱな「高機能化」だと思うのですが、おかしな世の中になって来たものだと感じます。

その後の展開です。有隣園に負けるのかもしれないという私の悪い予感を、子供たちは見事に振り払ってくれたのです。

3区でタスキをもらった時の順位は、有隣園、友愛園B、有隣園、友愛園A、神武の家でした。友愛Bの走者はコトミ（小5）でした。なかなか感情のコントロールができずによく保母さんや他の子とケンカをしているというのが日常の印象でしたけど、なんと壮快な走りをしているのでしょうか。私の前を髪をなびかせさわやかな笑顔で走り抜けていきました。そして1位となってタスキをつないだのです。

友愛Aの方は5区まで4位でしたが、その流れを変えて変えたのはレン（高1）です。かなり距離も開いていたのにぐんぐん追いつめ2位にあがったのです。“部屋が片づけられずグチの多いレン”が別人のように真剣に走っています。高校の野球部に所属していますが、このような男らしい走法で高校のグラウンドを疾走しているのでしょうか。彼の秘めた力を感じますし、もっと自分に素直に自信をもって生活してほしいと思います。目頭が熱くなるのを感じながら、「レン、かっこいいぞ！」と叫びました。

この友愛Aはまたその後有隣に抜かれますが、8区のリュウト（中2）が抜きかえし2位となり、9区のリョウナ（中1）が1位にあがります。リュウトの走りもリョウナの走りも力強いものでした。リュウトも中2になって背も伸び、大人びて来ています。能力は高いものを持っているのですが、まだ自信とプライドが足りません。この走りですべて自信をつけたのだらうと思います。リョウナは、小規模児童養護施設で生活していますが、中学生にあがって急に回りから頼られるようになり悩みが多いと職員から聞いています。長く一緒に生活して来た先輩たちが次々に大学等に進学したりし

て、自分がまとめ役的存在に置かれるようになり、息苦しさを感じているのでしょう。この走りを見れば学力の高さだけではなく、根性も体力も十分に持っていると分かります。ぜひ自信を持って大学をめざしてがんばってほしいと感じます。

10区が最終区です。1位争いは、友愛Aと友愛Bによる接戦となりました。友愛Aはケイテツ（高2）、友愛Bはリョウ（高2）です。ケイテツは高校でサッカー部、リョウは高校で野球部、デッドヒートとなり、一時も目が離せませんでした。互いのプライドをかけた戦いです。リョウは体もできてきてガッチリした体格となり、ラグビー部のような根性ある走りでケイテツをリードします。ケイテツも入所した頃はやせた少年であったのに、リョウに負けない走りをしています。サッカー部でかなり走り込んでいるのでしょう。走る姿を見てもう少年ではなく青年です。リョウに全く負けていません。2周目も互いにゆずらず、風のように私の前を走り抜けていきました。ゴールの方からも大きな声援が聞こえます。私も振り返り2人の姿を目で追っていきます。

最後はケイテツの作戦勝ちでした。後半、リョウの後をつけて余力を残し、最後の直線でリョウを追い抜いたのです。大歓声を聞きながら涙をこらえて空を見上げると、青空に雲が少し流れ、風も吹き始めていることに気付きました。桜の木もしっかりと芽を結び、これから来る寒風に備えています。2人ともあと1年ちょっとしか園生活がありません。大学進学を实践するためには、成績を上げることはもちろんですが、自戒自規、自分の中で湧き上がる欲望をしっかりコントロールして、生活習慣を確立させる努力を今まで以上に続けてほしいと願います。この日の2人の戦いは、おそらく一生2人の心の財産として残っていくことでしょう。

私にとっても、職員たちにとっても、子供たちにとっても、感動的な一日となりました。有隣園にとっては、1位、2位を友愛園に取られ、屈辱を感じた一日となったのかもしれませんが、今後、反省を練習に生かし、新たに打倒友愛園をめざすことでしょう。駅伝初参加の神武の家は、メンバーが少ないということもあり、期待したほどの結果は残せなかった（5位）のかもしれませんが、子供たちも職員たちもまた来年に向けて挑戦する気概を持ってほしいと思います。応援にきてくださった石井十次の会の皆様、そして卒園生の皆さん、ありがとうございました。